

## 〈実践報告〉 文学教材を論理的に読む

——村上春樹『バースデイ・ガール』の授業——

山 田 哲 久

はじめに

国語科教育に携わるものにとって、ここ数年は自分のこれまでの授業実践を振り返り、またこれから行うべき授業実践について思いをめぐらす日々だったのでないだろうか。新学習指導要領をめぐる議論は、国語の授業とはどうあるべきかという、本質的な問題について考える機会を私たちに与えることになった。中学校では既に二〇二一年度の一年生から新課程での授業が始まっている。高等学校でも、二〇二二年度の一年生から『現代の国語』と『言語文化』の授業が始まり、その生徒たちは二年生になると『論理国語』、あるいは『文学国語』の授業を受けることになる。このような国語科教育の転換期において本稿で考えたいのは、教室で文学を〈読む〉ということの意味である。

今回の改訂の背景にあるのは、野矢茂樹氏の言葉に表れているように、文学を読むことよりも「実用文や論理的な文章をしっかり読み、書ける力を育てることの方が優先順位が高い」という考え方がある。もちろん「実用文や論理的な文章」を正確に〈読むこと〉や〈書くこと〉が重要であることに異論はない。しかし、それらの能力を向上させるための教材として「実用文や論理的な文章」以外には考えられないのだろうか。なぜ、文学教材を通して「実用文や論理的な文章」を読み・書く力は身に付かないということになるのだろうか。

文学の授業の必要性を批判的に捉える論者に共通するのは、自身の授業体験をその批判の根拠とすることだ<sup>②</sup>。教師の個人的な解釈を一方的に押しつけられたという体験を踏まえた批判である。それは紅野謙介氏が正しく指摘するように、論者の「ルサンチマン」<sup>③</sup>で

〈実践報告〉 文学教材を論理的に読む

しかないのだが、『文学国語』よりも『論理国語』が優先される根拠の一つとなっている。

しかし、そのように経験が『文学国語』よりも『論理国語』を優先することの根拠の一つになっていること自体、少々乱暴な論理ではないだろうか。そもそも、その教師は本当に根拠を一切示すことなく、またその根拠の妥当性を審議にかけることなく、一方的に自分の個人的な解釈を生徒に押しつけたのだろうか。であれば、それは改善が必要な授業であることに間違いはない（もちろん、「だから、文学はいらない」ということにはならない）。しかし、ある一つの解釈が導き出される過程が説明されながら、それが自身の解釈と合致しないから、押しつけられたように感じたのであるならば、それは文学の問題ではなく、授業の方法の問題である。

文学テキストが多様な解釈の可能性を有していることは、周知の事実である。しかし、それはある教師が様々な可能性を踏まえた上で授業で提示した解釈と、例えば私が今ここで直感的に思いついた解釈が、等価値であるということではない。文学テキストは多様な解釈の可能性を有しているが、同時にそれぞれの解釈はその妥当性の審議を経る必要があるということでもある。どの解釈がより妥当で説得力があるのか、文学テキストの解釈はそのような審議を受けなければならない。日本近現代文学研究はまさにそのようなシステムに

よって成立している分野である。

このような文学テキストの特性を利用しながら、新学習指導要領とは別の回路によって「実用文や論理的な文章」を読む力を身に付けるといふ到達点を目指したのが、本稿で紹介する授業実践である。

村上春樹『バースデイ・ガール』は、「伝え合う言葉 中学国語 3」（二〇二二年一月二〇日、教育出版）の「八 未来のあなたへ」の章に収録されている。配当時数は「2時間」に設定されており、いわゆる「読書教材」としての扱いになっている。よって、『バースデイ・ガール』の授業実践としても、「授業の展開【学習の流れ】」が示すように、「第1時 全文を通読して、あらすじと登場人物の人物像を捉える。」「第2時 表現上の特徴を調べる。自分だったら二十歳の誕生日に何を願うか、自由に考えて交流し、紹介し合う。」といった、生徒たち自身がそれぞれに「自由に考え」た内容を発表し、それを中心に「交流」するといった展開が想定されている<sup>④</sup>。このような授業展開は、『バースデイ・ガール』が最初に教科書に掲載されて以来、大きな変化はない。

教材のこのような位置づけから、五十嵐淳氏は「一読したあと、感想を述べさせたり村上春樹について一言解説して授業を終えるのが、一般的なやり方」とし、教材としての『バースデイ・ガール』を、「読書体験を反芻し、自分の生き方にも思いを馳せる」という

「小説の読みの面白さを体験させるに適した教材」であるとす<sup>⑤</sup>。

また、黒田大河氏は、授業では「学習者生徒が自ら主体的に作品の世界を解き明かそうと考えること、その出発点となるような問いかけを与えることが重要」であり、「指導者から小説の構造を詳細に解き明かすような授業展開は必要ない」と述べ、『バースデイ・ガール』の授業を「学習者生徒一人ひとりが人生における選択の意義を考える機会」と位置づける<sup>⑥</sup>。『バースデイ・ガール』に与えられる授業時数が「2時間」と考えるならば、教員は最低限の「問いかけ」だけを行い、後は生徒の読書行為を支える役割に徹するのが現実的であり、指導書も教師にそのような「役割」を求めている<sup>⑦</sup>。

しかし、『バースデイ・ガール』を「読書教材」としてのみ扱うことは、その文学教材としての可能性を最大限に引き出しているとは言えない。『バースデイ・ガール』の先行研究では、「彼女」の「願いごと」の具体的な内容や、語り手としての「僕」の役割、またテキストの構造などが議論されてきた。論理的な手続きを踏まえた多様な解釈が提示されているのである。学術論文としての先行研究は「実用文や論理的な文章」である。これらを実際の授業で利用することで、文学教材を扱いながら「実用文や論理的な文章」を読む力を身に付けることが可能になるのではないか。また、複数の先行研究の中から最も説得力があるものを選択するという過程は、高

度な「比較読み」の実践ともなるだろう。

もちろん、これらの成果を中等教育に活用するためには課題がいわけではない。一つは、難易度の問題である。学術論文を中学三年生に正確に理解させることには大きな困難が伴うだろう。そして、もう一つは授業時間の問題である。中学校の新学習指導要領においては、〈読むこと〉に利用できる授業時間数が大幅に減少するため、文学の授業にさらに時間を割くことは難しいだろう。そこで、学術論文を読むための言語レベルを有し、文学教材を精読する授業実践が可能な学年として、本稿では高校三年生を設定したい。

本稿は、同志社女子中学校・高等学校の二〇二〇年度高校三年生を対象とした選択授業「国語総合Ⅱ（現代文）」において、『バースデイ・ガール』を取り上げた際の授業実践（五時間）報告である。「国語総合Ⅱ（現代文）」は、「近現代の文学作品の読解、鑑賞」を目的とするものであり、新課程の「文学国語」に相当する科目である。「文学国語」においてどのような授業実践が可能であり、またその授業実践によってどのような能力の涵養が期待されるかについて考察したい。

### 1、「彼女」の願いごととは何かを考えるために

前述したように本授業の目的は、〈学術論文としての先行研究を

利用することで、文学教材を通して「実用文や論理的な文章」を読む力をつける」ことである。そのような目的を達成するためには、まず生徒たちが初読の時点で物語内容をどの程度理解しているのかを測定することが必要である。それによって、生徒たちにとって最も効果的な授業内容を決定することができる。

さて、生徒たちの初読時の理解度を測定する方法として、本授業においては最初の音読の後に「A、「彼女」の願いごととはどのようなものだと考えられるか。」と「B、Aのように考えられるのはなぜか。」という二つの間に答えてもらうという形を採用した。

ただし、これは授業の中心を「彼女」の「願いごと」の特定に置くという意味ではない。「彼女」の「願いごと」の内容は明確には語られていないため、一つの正答を導き出すことはできない。あくまでも「彼女」の「願いごと」が「どのようなものだと考えられるか」というレベルでしか取り上げることではできないのである。しかし、それがどのような「願いごと」であったとしても、そのように「考えられる」根拠は本文にあるはずである。よって、生徒たちに右の課題に取り組んでもらうことで、まずは本文を精読してもらうことにした。漠然と音読させるよりも、目的が明確な音読の方が作業効率も向上するだろう。

ただし、音読の後、何のサポートもなく前述の「二つの問」に取

りかかってもらったわけではない。大きな誤読を避けるために、読後、本文の構成について解説し、解釈に関わる前提を教室で共有できるように方向付けた。

本文は一行あきで、八つの段落に分けられている。この八つの段落をさらに「a、二十歳の誕生日を迎えた彼女の物語」(①③④⑥)、「b、三十歳を過ぎた彼女がAの出来事について「僕」と対話する物語」(②⑤⑦)、「c、老人の台詞が繰り返される結末」(⑧)の三つのレベルに分類した。ここで生徒たちに注意を促したのは、テキストにおける話題の中心は「彼女」である一方で、語り手は「僕」であるという点である。つまり、「僕」は「彼女」から「彼女」の「二十歳の誕生日」に起こった不思議な出来事について、その出来事が起こった「十年以上」後に聞き、その聞いた物語を再構成しながら語っているということになる。

aの部分「彼女」を視点人物とした三人称で語られ、bの部分「僕」の一人称で語られ、cについてはどの視点から語られているかが曖昧な語りである。しかし、これら複雑な構成も全て語り手である「僕」によって作られたものである。

また、以前の授業で語り手と作者を同一視する読解が見られたことを踏まえ、語り手である「僕」は物語世界内に登場する人物の一人でもあることから、「物語世界内の語り手」であり、語り手であ

る「僕」と実体としての作者である村上春樹は切り離して考えるべきであることも同時に伝えた。

以上のような前提を共有した上で、生徒たちには先に述べた「A」「彼女」の願いごととはどのようなものだと考えられるか。」と「B、Aのように考えられるのはなぜか。」という課題に取り組んでもらった。課題は授業時間内に回収し、こちらで回答を整理した上で、次の授業で生徒たちのBの回答だけを紹介した。Aの回答を紹介しなかったのは、生徒たちには、まず本文のどのような表現に注目すれば「彼女」の願いごとを特定できるのかを意識してもらいたかったからである。生徒たちにとっては、他者の解釈の過程を知る機会にもなるだろう。

では、生徒たちは本文のどのような表現に注目したのだろうか。

多くの生徒たちが注目したのは「老人」の台詞である。「願いごと」を「かなえ」る立場の「老人」が自ら提示した条件が、「彼女」の「願いごと」の内容に直接影響を与えると考えるのは自然である。「老人」の台詞を踏まえれば、「彼女」の「願いごと」は「形」や「値段」のあるものを求めるものであってはならず、「こうなればいい」という願い「でなければならぬ」(①)。そして、「かなえて」も「願いごと」は「一つだけ」である(②)。

また、「彼女」の「願いごと」を聞いた「老人」の台詞に注目し

た生徒も多かった。ここでの「老人」の台詞は「彼女」の「願いごと」に対する反応なのだから、そこから「願いごと」の中身を想像するという姿勢も妥当なものである。例えば、「君のような年頃の女の子にしては、いっぷう変わった願いのように思える」や「例えば、そうだな、もつと美人になりたいとか、賢くなりたいとか、お金持ちになりたいとか、そういうことじゃなくてもかまわないんだね？ 普通の女の子が願うようなことを」という台詞である(③)。(④)。しかし「いっぷう変わった」や「普通の女の子」という表現に関しては、「老人」の個人的な価値観であるため、「彼女」の「願いごと」を特定するための根拠にはなりにくい。「老人」にとつての「変わった」や「普通」と、読者のそれが一致するとは限らないからである。

そして、少数ではあるが、「老人」の「これで君の願いはかなえられた」や「君の願いはすでにかなえられた」という台詞に注目した生徒もいた。「老人」のこれらの言葉が正しいものであるならば、「彼女」の「願いごと」はそれをした時点で既にかなえられているものだということになる(⑤)。

一方で、場面bにおける「彼女」の台詞に注目した生徒たちも多かった。それは「僕」の「その願いごとが実際にかなったのかどうか」という問いに対する「彼女」の次のような回答である。

最初の質問に対する答えはイエスであり、ノオね。まだ人生は先が長そうだし、私はものごとのなりゆきを最後まで見届けたわけじゃないから。

この「彼女」の言葉から「願いたい」との内容が「人生」に関わるものであると考えた生徒は多かった。しかし、ここから読み取ることのできる内容はそれだけではない。授業では、「イエスであり、ノオ」という「彼女」の言葉を（願いたいとは）今のところは叶っている」と解釈した生徒の回答を紹介しながら、「彼女」のこの言葉について、次のような補足説明を行った。

この言葉が「その願いたいことが実際になかったのかどうか」という「僕」の「質問」への「答え」であるということに注目するならば、「イエスであり、ノオ」とは（かかったとも言えるし、かかっていないとも言える）ということになる。そして、その理由として「彼女」が挙げるのが、今が「人生」の途中であることと、「彼女」自身が「ものごとのなりゆき」を「つまり「願いたいことが実際になかったのかどうか」という結末を――「最後」まで見届けたわけではないということである。「彼女」は「願いたいことが実際になかったのか」という「質問」に対してただ（分らない）」と答えているのではなく、「イエスであり、ノオ」と答えている。「イエス」（かかった）と言えるのは、少なくとも現時点では「その願いたい」が

なっていると考えるからであり（⑥）、「ノオ」（かかっていない）とも言わざるを得ないのは、その「願いたい」がなかったかどうかの最終判断は「人生」の「最後」まで先送りされるものだからだということになるだろう（⑦）。

「彼女」の願いたいごとの条件を整理すると【板書1】のようになる。

#### 【板書1】

彼女の願いたいごとの条件

- ① 形や値段があるものではなく、「こうなればいいという願いたい」。
- ② 一つだけ
- ③ 二十歳ぐらいの女の子にしてはいっばう変わった願いたい。
- ④ 美人になりたいとか、賢くなりたいとか、お金持ちになりたいといったような「普通の女の子」が願うようなことではない。
- ⑤ 願いたいごとの時点で既にかなえられている。
- ⑥ 現時点では「イエス」（かかっていない）と言える。
- ⑦ なかったかどうかの最終判断は人生の最後まで先送りされる。

#### 2、先行研究の検証と比べ読み

続けて、「彼女」の「願いたい」とはどのようなものだったと考えられるかということについての考察に移ったのだが、ここでは生徒たちの回答を紹介する形ではなく、『バーステイ・ガール』の先

行研究で示された「彼女」の「願いごと」のそれぞれについてその妥当性を検討するという形式を採った。生徒たちが示した回答のほとんどが先行研究で示された「願いごと」に回収されるものだったからである。

このような授業展開が可能であるのは、課題を通して生徒たちが高いレベルで物語内容を理解しているということが確認できていたからである。物語内容の理解が不十分であると判断されれば、そのような段階に応じた別の授業展開が必要になるだろう。

それぞれの先行研究にはそれぞれの論理展開があり、結論に至る過程を把握することが重要であることはもちろんだが、授業時間の都合でそれぞれの論文の全文を取り上げることにはせず、一部を引用したものをプリントとして配付することにした。また、それぞれの先行研究について、【考察】という項目を設け、批判のための視点を紹介する形を採った。他者の意見を論理的に批判するための手続きを身に付けてもらうための試みである。

最初に取り上げたのは、波瀬蘭「バースデイ・ガール」あるいは物語の空白について<sup>⑧</sup>である。その中で波瀬氏は「彼女」の願いごとについて、次のように述べている。

たとえ興醒めでも敢えて答えを示せば、それは「これから先、何も（願いごと）を持たずにすむ人生を送れますように」とい

（実践報告）文学教材を論理的に読む

ったものであるはずだ。（はずですよ。なるほどと頷いていただけることが今はずっと一つの願いです。）

ここで【考察】の視点として挙げたのは「波瀬氏の考察は右の条件にあてはまっているだろうか？」というものである。授業内容を踏まえて、先行研究の矛盾を探すという形である。仮に「彼女」の願いごとが波瀬氏の述べるように「これから先、何も（願いごと）を持たずにすむ人生を送れますように」であったのであれば、それは「⑤願いごとをした時点で既にならえられている」のだから、現在の「彼女」に「願いごと」はないはずである。しかし、西田谷洋氏が述べるように、現在の「彼女」の「人間というのは、何を望んだところで、どこまでいったところで、自分以外にはなれないものなね」という台詞からは「現在」においても「彼女が願いを持ち続けていること」が明らかである。よって、波瀬の指摘は妥当ではないと判断される。

次に取り上げたのは、可児洋介「村上春樹『バースデイ・ガール』における語りの機能」である。可児氏は「彼女」の願いごとの内容について次のように述べる。<sup>⑩</sup>

「彼女」は老人に自らの欲望を先取りして与えられているのかのような錯覚に半ば陥りながら、先刻の「老人」の台詞を口に出して、反復したに相違ないのである。すなわち「私の人生が実り

のある豊かなものであるように。なにもものもそこに暗い影を落とすことのないように」と。

可児氏の主張の根拠となっているのは「彼女」の「反復」である。よって、ここでの【考察】の視点は「なぜ「彼女」が「老人」の台詞を反復したと言えるのだろうか?」とした。では、本文における「彼女」の「反復」とはどのようなものだろうか。

「もちろん。私はかまわんよ。君がそう望むなら。」／私がそう望むなら? と彼女は思った。ずいぶん奇妙な言い方だ。私がいったい何を望んでいるのだろうか?

ここでの「彼女」の反応について、可児氏は「「彼女」が老人によって「何かを望んでいる自分」という自己像を与えられている」と指摘する。同様の「反復」は次の箇所にも登場する。

「ああ、もちろん。廊下に出しておくよ。ワゴンに乗せて。一時間後に。君がそう望むのなら。」／そう、それが私の望むことなの、今のところ、と彼女は心の中で思った。

確かに「彼女」はここで「老人」の「台詞」を「反復」している。しかし、「彼女」は「老人」の台詞をただ「反復」しているわけではない。そのような「反復」への批判として紹介したのが、西田谷洋「エコーとユーモア」である。<sup>11)</sup>

しかし、波瀬氏は「人間というのは、何を望んだところで、ど

こまでいったところで、自分以外にはなれないものなのね」という発言が彼女が願いを持ち続けていることを意味することを無視し、可児氏は彼女の老人への否定を把握できていない。

ここでの【考察】の視点は「西田谷氏が言う「彼女の老人への否定」とはどのようなものか?」とした。先行研究では簡潔な表現で示されている論理を、具体的に説明するという過程を通して、その理解度を測るという試みである。確かに「彼女」は「老人」の「台詞」を「反復」している。しかし「彼女」はここでそれが「奇妙な言い方」であるという批評性を含めて「反復」しているのである。

また、「今のところ」とは〈食事の配膳という仕事の上では〉ということであり、決して何かを望んでいる自分」という自己像を与えられ「た結果としての「反復」ではない。

また、黒田大河氏は可児氏が示した「私の人生が実りのある豊かなものであるように。なにもものもそこに暗い影を落とすことのないように」という「願いごと」について、「①「形」や「値段」があるものではなく、「こうなればいいという願い」と②「つだけ」という条件と矛盾すると述べる。<sup>12)</sup>

ここまで示したように、学術論文としての先行研究をただ紹介するだけではなく、その論理的な矛盾点を精読によって明らかにする作業は、「実用文や論理的な文章」を読むための能力を身につける

ために十分有効であると考える。

例えば、「彼女」の願いごとが「これから先、何も〈願いごと〉を持たずにすむ人生を送れますように」や「私の人生が美りのある豊かなものであるように。なにもものそこに暗い影を落とすことのないように」ではないということは、それらが具体的なものであるがゆえに、本文に〈何が〉書かれていて、〈何が〉書かれていないのかというレベルから判断することが可能である。

しかし、例えば「平凡でもいいから幸せな人生を送りたい」<sup>13</sup>や「自分の人生の意味を知りたい」<sup>14</sup>といった願いごとの妥当性については、現在の「彼女」を考慮に入れて判断する必要があり、〈何が〉書かれていて、〈何が〉書かれていないかというレベルだけではなく、〈何が〉〈どのように〉語られているかというレベルでの読解が必要になる。そこで注目したのが、テキストにおける「反復」の意味の多様性である。

### 3、論理的であるということ

#### —— エコー発話の理解 ——

先に述べたように可児氏はテキストにおける「彼女」の台詞の「反復」に注目して、「願いごと」の具体的な内容を特定しようと試みた。一方で、『バースデイ・ガール』ではそもそも「彼女」の

「願いごと」が「確定されないこと」が「物語生成の基盤として重要である」と考え、「彼女」の「反復」を「エコー」として捉えたのが西田谷洋氏である。<sup>15</sup>

論理は普遍的なものではない。論理的であるためには、その根拠が必要になる。では、西田谷論の論理を支えているものは何か。そのような問題意識を生徒たちと共有しながら、次に授業で取り上げたのが、「エコー」という概念の理解である。

まずは西田谷論では「エコー」が「語り手がその価値観と共に他者の言葉を引用・創造する方法である」と定義されていることを確認した。<sup>16</sup>「エコー」がただの「反復」と異なるのは、そこに語り手の「価値観」が反映される点である。そこで、先ほどは「反復」と捉えた「彼女」の台詞を「エコー」として捉え直し、そこに「彼女」のどのような「価値観」が反映されているかの検証に移った。

「もちろん。私はかまわんよ。君がそう望むなら。」／私が、そう望むなら？ と彼女は思った。ずいぶん奇妙な言い方だ。私がいったい何を望んでいるというのだろうか？

「彼女」は「老人」の台詞を「ずいぶん奇妙な言い方」だと捉えており、「私がそう望むなら？」という「エコー」には「彼女」の「老人」の台詞に対する否定的な価値観が反映されている。

「ああ、もちろん。廊下に出しておくよ。ワゴンに乗せて。一

時間後に。君がそう望むのなら。／そう、それが私の望むことなの、今のところ、と彼女は心の中で思った。

既に述べたように、「今のところ」とは〈職務上は〉ということであり、「彼女」が本心から望んでいるわけではない。つまり、「彼女」の「そう、それが私の望むことなの」という「心の中」の台詞は、「老人」の台詞を否定的に「エコー」しているだけであり、台詞の「反復」は可児氏の言うように「何かを望んでいる自分」という自己像を与えられた帰結ではないのである。

何ものもそこに暗い影を落とすことのないように、と彼女は頭の中で老人のせりふを反復した。どうしてこの人は、こういうちよつと普通じゃないしゃべり方をするんだろう？

ここで「彼女」が「頭の中で老人のせりふを反復した」のは、それが「普通じゃないしゃべり方」だったからであり、ここでの「反復」も否定的エコーである。

具体的に「エコー」の用例を確認していくことで、「彼女」が「老人」の台詞を「エコー」する際には常に否定的な態度を示していることが明らかになる。よって、「彼女」が「老人」に発話をコントロールされているという指摘は妥当ではない。このような過程によって可児論への批判の根拠を説明することが可能になるのである。

このように「パースデイ・ガール」には「エコー」が多用されているのだが、「エコー」という概念の援用は、次に引用した「僕」と「彼女」のやりとりを解釈する際に最も効果を發揮する。

「それほど悪くなさそうだけど。」と僕は言う。／「車のバンパーに二つばかりへこみがあっても？」／「だってバンパーはへこむためについているんだよ。」／「そういうステッカーがあるといいわね。」と彼女は言う。／「バンパーはへこむためにある。」

ここで「彼女」は「僕」の「バンパーはへこむためについている」という台詞を、「バンパーはへこむためにある。」と「エコー」している。授業では、「エコー」の定義を踏まえ、ここでの「エコー」がどのような意味を持つのかということについて考えた。

そのためにはまず「彼女」の「車のバンパーに二つばかりへこみがあっても？」という台詞の意味を考えなければならない。そもそも、この台詞は「僕」の「それほど悪くなさそうだけだ」という指摘に対するものである。「悪くなさそう」なのは「彼女」の「人生」であり、この時点で「僕」と「彼女」が共有する話題は「人生」である。つまり、「彼女」の「車のバンパーに二つばかりへこみがあっても？」という台詞は、自分の「人生」に「へこみ」、つまり深津謙一郎氏が言うように「何らかの欠落」<sup>17)</sup>があることを示唆してい

ると考えられるのである。

では、それに対する「僕」の「バンパーはへこむためについて」という台詞はどのような意味を持つことになるのだろうか。これはもちろん「バンパー」の機能について述べたものではない。会話の話題は「人生」なのだから、「僕」は「彼女」に対して人生には満足できない部分があつて当然であると慰めているのである。<sup>⑧</sup>

このように、「僕」と「彼女」のやりとりが「人生」という文脈の中で交わされているものであることを正確に理解させる必要がある。「彼女」は「僕」の「バンパーはへこむためについて」という台詞を「エコー」しているが、その前に「彼女」が「そういうステッカーがあるといいわね」と述べていることに注目すると、「彼女」が「僕」の台詞を「ステッカー」として「エコー」していることになる。しかし、「僕」の台詞の本来の意味を支えているのは、「彼女」との会話という文脈であり、その文脈を離れてしまうと、『バンパーはへこむためにある』は単なる車の機能上の説明になつてしまう。「彼女」はあくまでも、「ステッカー」として「僕」の言葉を「エコー」したのであり、その意味で「彼女」は「僕」の言葉を「人生」という文脈から引き離れたということになる。よつて、ここでの「彼女」の「エコー」は言葉の本来の意味を変えたという意味で否定的「エコー」となるのである。

〈実践報告〉 文学教材を論理的に読む

（人生には満足できない部分があつて当然だ）と慰めた「僕」に對して、「彼女」は否定的に「エコー」したのでから、「彼女」はこどもも自分の人生に満足できない部分があると述べていることになる。つまり、「彼女」は自分の現在の人生に何らかの不満を抱えていることを繰り返し主張していると考えられるのである。

現在の「彼女」は自分の「人生」に対して何らかの不満を抱えているのだから、「平凡でもいいから幸せな人生を送りたい」という「願いごと」は現在において叶っていないことになる。以上のような論理的な手続きから、「彼女」の願いごととは「平凡でもいいから幸せな人生を送りたい」とは異なるものであると言えるだろう。

#### 【板書2】

僕 「(「彼女」の「人生」は) それほど悪くなさそうだけど」

← 話題は「人生」

彼女 「車のバンパーに二つばかりへこみがあつても？」

(自分の「人生」に満足できない部分があることを示唆)

←

僕 「バンパーはへこむためについて」

(人生には満足できない部分があることは当然であるという慰め)

※ただし、右のような意味として捉えるためには、「彼女」との会話という文脈が必要。

←「ステッカー」としてエコー

彼女「パンバーはへこむためにある」

（「彼女」は人生について述べられた「僕」の言葉を、車の機能についてのものとしてエコーしているのだから、否定的エコー）

←

彼女は自分の人生に何らかの不満を抱えている。

#### 4、願いたいこと「彼女」の人生

なぜ「彼女」は自分の「人生」に「不満」を抱えているのだろうか。「僕」は「彼女」に「君はそれを願いたいこととして選んだことを後悔していないか？」と問いかけるが、その「僕」からの問に対して「彼女」は言葉で答える代わりに、ある様子を「僕」に見せる。それが「奥行きのない目」と「ひからびたほえみの影」である。

その後の「彼女」の台詞が「僕」の間とは全く対応しないものであることを考えると、「彼女」のこの様子が、「僕」の問に対する「答」だと考えられる。「彼女」は「後悔」しているのである。

ここで「彼女」の現在について整理しておこう。「彼女」は自分の人生に何らかの不満を抱えており、「それを願いたいこととして選んだこと」を「後悔」している。つまり、「彼女」の現在の人生への不満には「願いたいこと」が関わっているのである。

では、「彼女」の現在の人生への不満と「願いたいこと」はどのように関わっているのだろうか。ここで忘れてはならないのは、「彼女」は現在時においても「彼女」が「老人」に「願いたいこと」をかなえてもらったことは「実際に起こったことだし、たぶん大事な意味をもつこと」だと認識しているということである。

確かに一方では、現在の「彼女」は、「老人」の話を「そっくり真に受けたわけではない」とか、「ユーモア」として「話を合わせてみようとと思った」だけだと「僕」に話している。しかし、「そっくり真に受けたわけではない」という表現からは、逆説的に「彼女」が「老人」の話を「そっくり」否定することができなかったということになるため、「願いたいこと」が「彼女」の現在にとって「大事な意味を持つ」と考える方が、「彼女」の現在の認識としては妥当であろう。つまり、「彼女は願いに現在も囚われている」のである。<sup>20</sup>「彼女」は現在「三歳年上の公認会計士と結婚していて、子どもが二人いる。」「男の子と女の子。アイリッシュ・セッターが一匹。ドイツ車に乗って、週に二回女友達とテニスをしている」という「人生」を送っている。しかし、そのような「彼女」の「人生」には、「二つばかり」の「パンバー」の「へこみ」と表現される、満足できない点がある。そして、「彼女」にとって「願いたいこと」は現在でも「大事な意味を持つ」のである。そして、「願いたいこと」は

「かなっている」はずなのだから、不満に感じる現状は自らの「願  
いごと」の結果として認識されることになるのである。

それは逆に自分の人生に満足することになっても同様である。そ  
れは、〈自分の努力の結果〉としても、〈運命のいたずら〉としても  
認識されず、ただ「願いごと」の結果として認識されることになる。  
つまり、彼女にとっては自分の人生がすべて「願いごと」に規定さ  
れているように感じられるのである。<sup>21)</sup>

### 【板書3】

「彼女」は「願いごと」は現在でも「大事な意味を持つ」と認識し  
ている。

↑つまり

「彼女」は「願いごと」に現在も囚われている。

↑ということは

何らかの不満や欠落感を抱えている場合

それらは「願いごと」の結果として認識される。

満足している場合

そのことが「願いごと」の結果として認識される。

↑つまり

自分の人生がすべて「願いごと」に規定されているように感じる。

おわりに

黒田大河氏は「彼女」の願いごとについて、次のように述べる。

「美しさ」、「賢さ」、「富」を手に入れたとき、自分の人生がど  
う変化するか分からず一歩引いてしまった「彼女」の願いと  
端的に言って「自分の人生の意味を知りたい」ということであ  
る。二十歳の時点で「人生というものがまだうまくつかめてい  
ない」、「その仕組みがよくわからない」と訴える「彼女」にと  
って、この質問の答えこそ生涯を掛けても知りたかったことな  
だ。<sup>22)</sup>

「自分の人生の意味」は人生を通して認識されるものである。そ  
う考えるならば、「老人」の「これで君の願いはかなえられた」と  
いう台詞とも矛盾はない。自分の人生の意味を知るための人生が、  
「願いごと」をした時点で既に始まっているのである。そして、現  
時点で「彼女」が考える「人生の意味」とは「人間というのは、何  
を望んだところで、どこまでいったところで、自分以外にはなれな  
いもの」だということであろう。

可児洋介氏は『バスデイ・ガール』を「教室」で論じるので  
あれば「生徒に何を願うかと問いかけるのではなく、むしろ何も  
願わないという選択肢が存在することを教えるべきである」と述べ

るが、何を「選択」するかは個々人の価値観の問題であり、国語科の教員が「教室」で扱うべき範囲を超えている。「教室」での教員はあくまでも、「鑑賞の仕方を教える」<sup>24</sup>役割に徹するべきである。

本稿で紹介した授業実践においては、複数の先行研究を比べ読みしながら、最も妥当な解釈を論理的に導き出すという授業展開を意識した。その授業展開には「文学好き」というパーソナリティは一切関係していなかったはずであるし、テキストを「情緒的な文章」と位置づけることもなかったはずである。教室において、文学教材は情緒的に読まれるものでも、ある価値観によって読まれるものでもない。教室で文学テキストを読むために必要なものは、感性でも価値観でもなく、論理と方法なのだ。

「論理国語」の「2目標」には「(2) 論理的、批判的に考える力を伸ばすとともに、創造的に考える力を養い、他者との関わりの中で伝え合う力を高め、自分の思いや考えを広げたり深めたりすることができるようになる。」とあり、その「目標」については次のように解説されている。

批判的にとしたのは、「論理的に考える力」に加えて、文章や資料における情報や、情報と情報との関係などをそのまま受け入れるのではなく、文章や資料を対象化して、その正誤や適否を吟味したり検討したりしながら考える力や、それを踏まえて

自分自身の思考を意識的に吟味する力を重視したことを示している。<sup>25</sup>

本稿は、ここで想定されている実践が「実用文や論理的な文章」ではなく、文学教材においても十分に可能であることを示したものである。ただし、なぜ文学教材でなければならないのかということ、また文学教材を扱うということの意味についてはさらに考察を深めなければならない。

#### 引用注

- ① 野矢茂樹「国語は何を教えなくてもよいのか」(『日本文学』第七〇巻 第三号、二〇二一年三月)
- ② 例えば、上野千鶴子氏は「論理国語が必要な理由」(『京都新聞』二〇二〇年九月二十八日)の中で「かねてわたしは、文学好きな国語の教師が情緒的な文章を読ませて『主人公はこの時どう感じたか』を尋ねたり、作文教育で『感じたことを思ったまま書きなさい』と指導してきたことを、困ったことだと思ってきた。こういう学生を大学で受け取るから、『考えたことを、論理的に述べなさい』という文章教育から始めなければならなくなるのだ。」と述べている。
- ③ 紅野謙介「混迷の深まるなかで——デイスカッサントとして」(『日本文学』第七〇巻第三号、二〇二一年三月)
- ④ 「授業の展開」(『伝え合う言葉 中学国語3 教師用指導書 教材研究編 下』二〇二一年一月二〇日、教育出版)
- ⑤ 五十嵐淳「村上春樹の教科書作品をどう読むか——小説「パースデ

「イ・ガール」の教材分析——」（『研究紀要Ⅹ』二〇〇八年八月、科学的「読み」の授業研究会）

⑥ 黒田大河「中学校国語科教材としての『バースデイ・ガール』論」

（『滋賀大学教育学部紀要 教育科学』第六八号、二〇一九年三月）

⑦ 『教師用指導書』（前掲）には「学習者にとって有意義な読書会を成立させるために指導者の役割は極めて大きい」とある。

⑧ 波瀬蘭「バースデイ・ガール」あるいは物語の空白について」（『村上春樹超短篇小説案内』二〇一二年八月、学研パブリッシング）

⑨ 西田谷洋「エコーとユーモア」（『日本文学』第六六巻第一号、二〇一七年一月）

⑩ 可児洋介「村上春樹『バースデイ・ガール』における語りの機能」（『学習院大学人文科学論集』第二二号、二〇二二年一〇月）

⑪ 西田谷洋「エコーとユーモア」（前掲）

⑫ 黒田大河「中学校国語科教材としての『バースデイ・ガール』論」（前掲）

⑬ 五十嵐淳「村上春樹の教科書作品をどう読むか——小説『バースデイ・ガール』の教材分析——」（前掲）

⑭ 黒田大河「中学校国語科教材としての『バースデイ・ガール』論」（前掲）

⑮ 西田谷洋「エコーとユーモア」（前掲）

⑯ 西田谷洋「エコーとユーモア」——「個」を損なう物語の在りか」（千田洋行・宇佐美毅編『村上春樹と二十一世紀』二〇一六年九月、おうふう）

⑰ 西田谷氏は「エコーとユーモア」（前掲）の中でここでの「僕」の発言の意味を「彼女の状況の瑕疵を取るに足りないものとしている言葉で

ある」と述べている。

⑱ 五十嵐淳「村上春樹の教科書作品をどう読むか——小説『バースデイ・ガール』の教材分析——」（前掲）

⑳ 西田谷洋「エコーとユーモア」（前掲）

㉑ 「彼女」にとつての「願いたい」との意味について、大木志門氏は「教材研究としての村上春樹『バースデイ・ガール』再論——「プールのサイド」と「三十五歳問題」を手がかりに」（『山梨大学教育学部紀要』第二五号、二〇一六年）の中で「現在の自らの生は、あの時ただ一度下した選択の結果であるという宿命論におちこんでしまふ」と述べている。また、西田谷氏は「エコーとユーモア」（前掲）の中で、「彼女は願いを想起するたびに、願いたい以外の人生を選択肢を消去したものとして自分の人生を顧みてしまふ」と述べている。授業ではこのような先行論を紹介しながら、【板書3】のような形に整理した。

㉒ 黒田大河「中学校国語科教材としての『バースデイ・ガール』論」（前掲）

㉓ 可児洋介「村上春樹『バースデイ・ガール』における語りの機能」（前掲）

㉔ 野矢茂樹「国語は何を教えなくてもよいのか」（前掲）

㉕ 『高等学校学習指導要領（平成28年告示）解説 国語編』（二〇一八年七月、文部科学省、一四五頁）